

連載 亀ちゃんにも言わせてよ！

犯罪者の家族は

前は非行少年の親の責任を追及する前に、今一度、冷静になってその親自身のことだけではなくその置かれている状況も含めひろく非行の背景を考えましょうということを書きました。今回は、少年非行に限らず犯罪者の家族について少々言わせてください。

それは青天の霹靂

もし、今日くつろいでTVを見ていたら、自分の家族が殺人などの重大な犯罪を犯して逮捕されたと報道されている映像が目に飛び込んできたとします。あなたは どう思いますか。しかも日頃から犯罪に結びつくような行動や態度は自分の前で一切見せていなかったとしたら。それはまさに「青天の霹靂」。多くの人は、しばらくは何も思いつかずに茫然自失となるのではないのでしょうか。そしてその後は、たとえば、何かの間違ひではないか（現行犯逮捕でなければ、なおさら無実を信じると思います）と思う気持ち、どうしてこんなことになったのかという思い、何てことをしたんだと本人を責める気持ち、本人が少年ならば自分の育て方に問題があったのではないかと自分を責める気持ちなど、いくつもの思いが全身をぐるぐると巡り続け言いようのない不安定な心境になっているものと思います。そのような状況のなかで人はどのような行動をとるのでしょうか。

何をしたら...

近時の少年犯罪報道では、「少年の親からは被害者へまだ謝罪の言葉がない」などと報じられることがよくあります。そしてその論調は非難を込めているように思います。

さて、一般に多くの人は、こういった報道を見聞きすると「何て親なんだろう。顔を見てやりたい。」などと思ってしまうのではないのでしょうか。

ここでちょっと冷静に考えてみてください。そういった親はほんとうに、ただ知らんぷりをして自分は関わりがないという態度なののでしょうか。誰がそう断言できるのでしょうか。起こった結果が重大なほど、上述のように心の中は混乱し、何をしたらいいのか、何を考えたらいいのか、誰に何を言えばいいのか、すぐには判断が付かないものと思います。

また、現行犯でなければ我が子の無実を信じたい気持ちになるのが親の心情だと思えます。犯罪（非行）事実も確定していないのに自分の子どもが犯人であるとして被害者のところへ心から謝罪に行けるのでしょうか。さらにいえば、たとえば動かぬ証拠があったり本人が犯行を認めていても、何かの間違ひではないかと信じたくなるのが親の心情ではないのでしょうか。そして実際に犯行を行ったとしても、引き起こされた事実が重大であるほど、その事実を受け入れるのは容易なことではないと思えます。

報道関係者は、加害少年の親が速やかに被害者へ謝罪していないという事実だけをとりあげて非難がましく報道するべきではないと思えます。ジャーリストを称するならば、加害少年の親がなぜ未だに被害者へ謝罪していないのか調べるべきでしょう。そこには必ず何らかの理由があるはずで、その上で、もし、非難すべき事実があればそれを指摘すればよいのではないのでしょうか。

犯罪者の家族も苦しむ

自分の家族が犯罪者となれば、その日からあなたの生活環境は変わらざるをえないでしょう。その犯罪事実が重大であるほど厳しい環境に身を置くことになります。過剰な取材や数々の嫌がらせ（大きく報道されるような事件では近時インターネット上に加害者の家族の情報まで流す者もいる）もあるでし

よう。それに近所のうわさや職場のうわさを気にして引っ越しを余儀なくされることも想像に難しくありません。

それだけではなく、人間関係においても、被害者にどう接すればいいのか、犯罪を犯した本人とどう接したらいいのか、生活環境を変えたとしても、そこで新たにできた職場の人・近所の人・その他の交友関係者に自分の家族のことを秘したままでいられるのかなど、多くの悩みと一生向き合っていかなければなりません。人はこれらの苦しみにどこまで耐え続けていけるのでしょうか。

実際に自分がそのような状況に置かれないと想像することすら難しいものです。わたしが最近読んだものに東野圭吾著『手紙』(毎日新聞社刊)という本があります。これは、主人公の兄がある日強盗殺人をして受刑者となり、主人公がさまざまな苦悩のなかで生きていく様子、刑務所から送られてくる兄の手紙を織り交ぜながら描いている作品です。みなさんも機会があれば手に取ってみてください。

亀山憲一 [会員・フリーで活動中の法学研究者 (犯罪学・刑事法)]